

高瀬の庚申塔 こうしん

庚申塔とは、「庚申さん」とも呼ばれ、江戸時代に広がった庚申信仰に伴い、各地で建てられた石塔です。庚申信仰とは、六十日に一度めぐってくる庚申（かのえさる）の日に、人間の体内にいる三尸（さんし）という虫が、人が寝ている間に体から抜け出して天に昇り、神にその人の悪事を告げ、その報告により寿命が縮まるといふ道教の思想に由来する民間信仰です。そのため、庚申の日には、三尸が体内から抜け出さないように、庚申様を供養し、共同で飲食をしたり、語り合いながら寝ないで夜を明かしたりする「庚申待ち」という行事が行われていました。庚申信仰は、主に江戸時代以降に全国的に広まり、各地で盛んに庚申を供養する石塔が建てられました。

高瀬の庚申塔は、役場吉備庁舎前の交差点から東へ農免道路に入り、約三〇〇メートル進んだ所にお祀りされています。北面する石塔の正面には、庚申信仰の本尊とされることが多い「南無青面金剛尊（なむしょうめんこん

んごうそん）」という文字や、「元禄五年十一月十五日」という年号が刻まれています。また、裏には石塔の建立に関わった願主十人の名前が刻まれており、今から約三二〇年以上も前の一六九二年に建てられたものであることが分かります。

町内各地には、庚申塔が数多く残されており、かつての人々の信仰を今に伝えてくれますが、高瀬の庚申塔はその中でも古い時代のものとして、貴重な文化遺産の一つです。

